

広島市の平和記念公園近くの河岸は、江戸時代は「港」だった。海上を運ばれたさまざまな物資が荷揚げされ、城下の暮らしを賄った。絵巻を見ると多くの船が浮かび、蔵も立ち並ぶ。にぎわう声まで聞こえてきそうだ。

当時をしのぶすがが本川橋西詰めによみがえった。「船つなぎ石」だ。直径二十センチ、高さは六十センチほど。船を係留する石杭で「もやい石」とも呼ばれる。

上部が欠けて、わずかに根元だけになっていた。しかし地元の人々の記憶では、数十年前までは完全な姿で残っていたという。ひよつとしたら欠けた部分が川底に沈んでいないだろうか。そう考えたのが特定非営利活動法人(NPO)法人「雁木組」だ。

船つなぎ石

探してみると、果たしてそれらしい石がやや下流で見つかった。根元と合わせると、断面の形や組成がほぼ一致する。つなぎ合わせで復元した。

広島を中心部は、原爆ですべてが失われた。焼け野原から再生した新しい街に、歴史のにおいはなかなか感じられない。

しかし築城以来、四百年の蓄積のある街である。やりようによっては、今の風景の向こうに歴史がにじみ出るようなまちづくりができるのではなからうか。

船つなぎ石は、一本の小さな杭にすぎない。しかしこれを手掛かりにしてかつての河港のイメージを膨らませることができる。市民の小さな試みはヒントにならないだろうか。

(石田信夫)

論説室 から